

第3章 非行についての認識

本章では、非行の原因についての少年と保護者の認識及び少年の問題行動等に対する保護者のこれまでの対応を見た上で、出院時の不安と実際に直面した問題、少年の立ち直りを支援するための保護者の行動及び少年が非行を思いとどまる「心のブレーキ」について見る。

第1節 非行の原因

本節では、以下に示した質問項目に対する回答に基づき、非行の原因についての少年及び保護者の認識について見る。

第1回少年調査 Q1

今回の非行の原因について、次の事柄はどのくらい当てはまると思いますか。

第1回保護者調査 Q1

今回のお子さんの非行の原因について、次の事柄はどのくらい当てはまると思いますか。

-
- ① 自分〔子ども〕自身に問題があった
 - ② 家庭や家族に問題があった
 - ③ 友だちなど付き合っている仲間に問題があった
 - ④ 学校や職場に問題があった
 - ⑤ 被害者に問題があった
 - ⑥ 運が悪かった

選択肢 とてもあてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない

1 少年・保護者の認識

3-1-1 図は、非行の原因についての認識を少年・保護者別に見たものである。

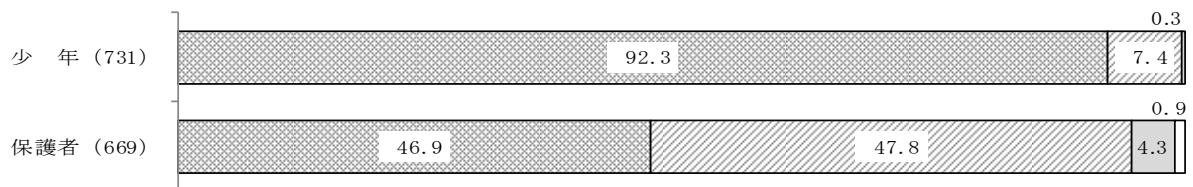
少年が「とてもあてはまる」又は「ややあてはまる」と回答した非行の原因は、「自分〔子ども〕自身」(99.7%)、「友だち」(72.9%)、「家庭や家族」(37.2%)、「学校や職場」(20.9%)、「運」(14.8%)、「被害者」(12.6%)の順であった。一方、保護者は、「自分〔子ども〕自身」(94.8%)、「友だち」(89.5%)、「家庭や家族」(83.8%)、「学校や職場」(34.1%)、「被害者」(16.9%)、「運」(11.1%)の順であった。

非行の原因について、少年と保護者の別に認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、「運」以外の全ての項目で有意差が認められた。

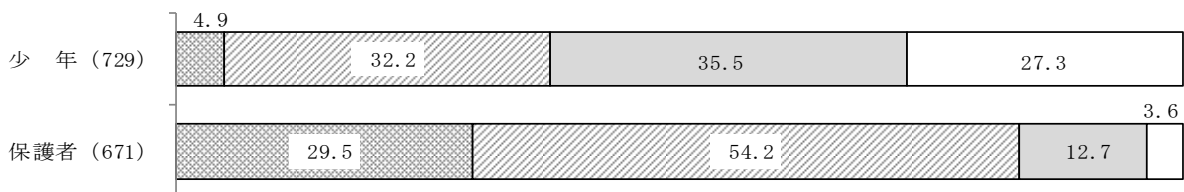
少年は、保護者と比べて、非行の原因は「自分自身」にあると認識している者が多く、「家庭や家族」、「友だち」、「学校や職場」、「被害者」には問題はなかったと認識している者が多い。一方、保護者は、少年と比べて、「子ども自身」だけでなく、「家庭や家族」、「友だち」、「学校や職場」といった、多方面において問題があったと認識している者が多い。

3-1-1 図 非行の原因についての認識（少年・保護者別）

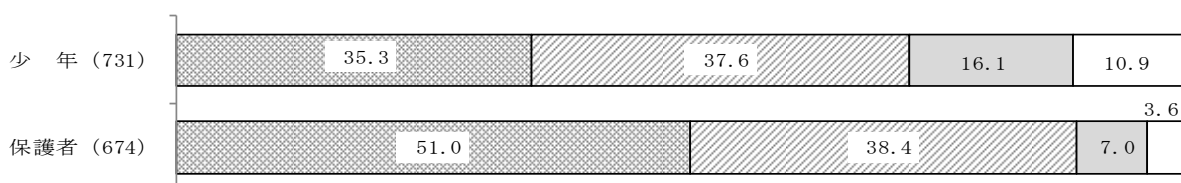
① 自分〔子ども〕自身 ($\chi^2(3)=348.411^{***}$)



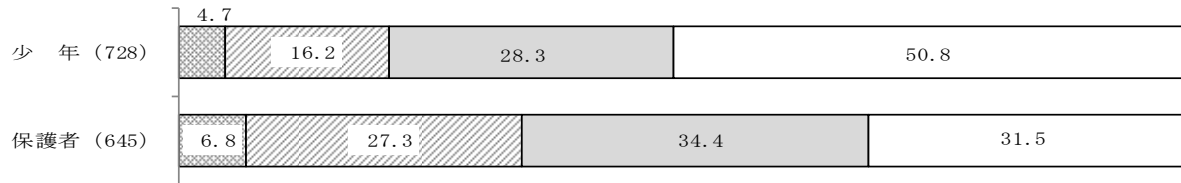
② 家庭や家族 ($\chi^2(3)=363.500^{***}$)



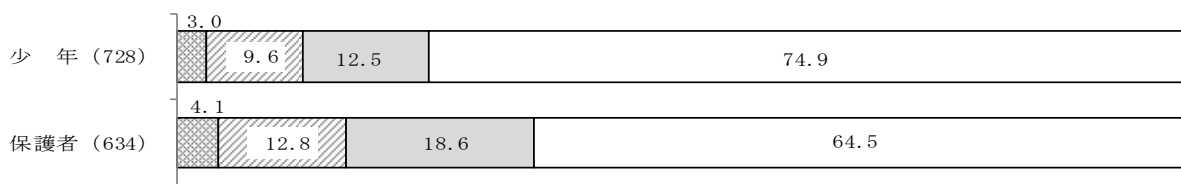
③ 友だち ($\chi^2(3)=71.275^{***}$)



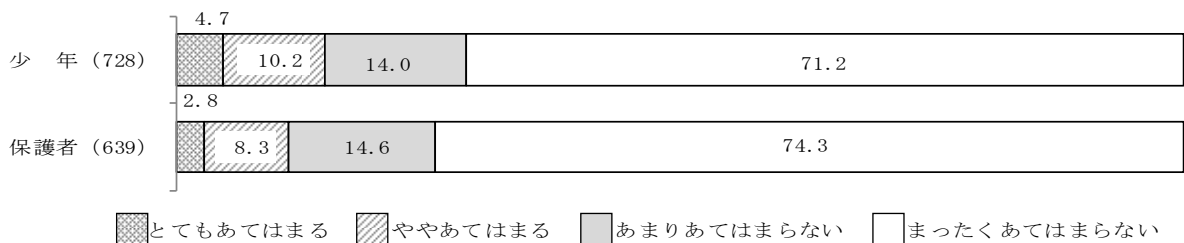
④ 学校や職場 ($\chi^2(3)=57.186^{***}$)



⑤ 被害者 ($\chi^2(3)=17.607^{***}$)



⑥ 運 ($\chi^2(3)=4.899$, n. s.)



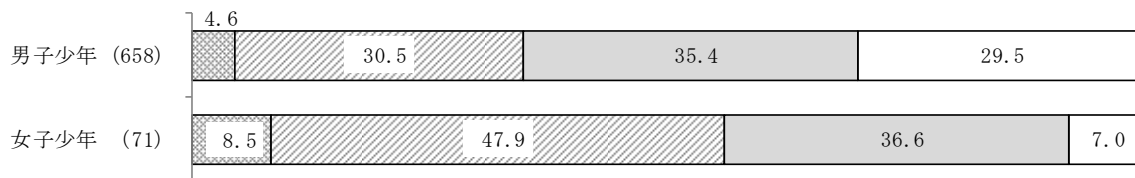
- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

次に、非行の原因について、少年の男女別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、**3-1-2 図**のとおりであり、有意差が認められたのは少年で2項目（「家庭や家族」、「運」）、保護者で1項目（「運」）であった。女子少年は、男子少年と比べて「家庭や家族」や「運」に原因があると考える傾向があることがうかがえる（巻末資料 3-1 参照）。

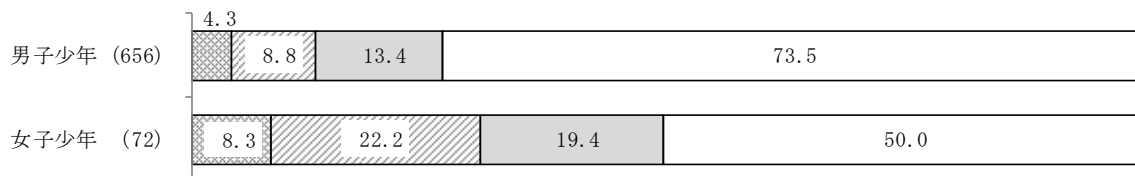
3-1-2図 非行の原因についての認識（男女別）

① 男子少年・女子少年別

家庭や家族 ($\chi^2(3)=19.792^{***}$)

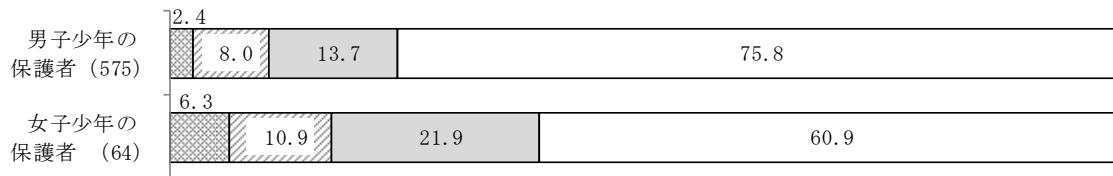


運 ($\chi^2(3)=20.432^{***}$)



② 男子少年保護者・女子少年保護者別

運 ($\chi^2(3)=7.912^*$)



とてもあてはまる
 ややあてはまる
 あまりあてはまらない
 まったくあてはまらない

- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

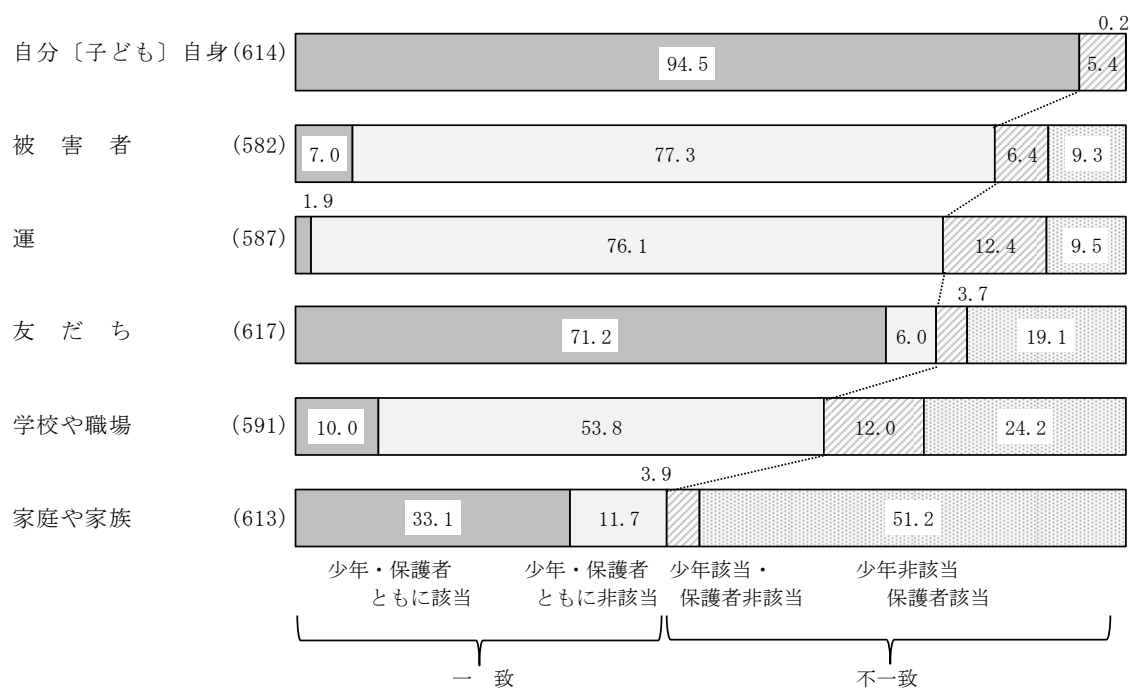
また、少年、保護者のそれぞれについて、短期処遇、長期処遇（初入）及び長期処遇（再入）（ここでは、短期処遇、長期処遇（初入）、長期処遇（再入）の順に非行が進んでいることとし、以下「非行進度別」という。）の別に認識の差異を独立性の検定を用いて分析した結果は、巻末資料 3-1 のとおりであり、短期処遇の少年は、「家庭や家族」について「まったくあてはまらない」に回答する割合が高かった。少年の保護者について有意差が認められたのは2項目（「家庭や家族」、「学校や職場」）であり、長期処遇（初入）の少年の保護者は、「家庭や家族」、「学校や職場」に問題があると認識している傾向がうかがわれた。また、虐待歴の有無別に認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、巻末資料 3-1 のとおりであり、被虐待歴のある少年は、

他の少年に比べて、「家庭や家族」について「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の割合が高かった。一方、被虐待歴のない少年は、「家庭や家族」について「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」と回答した割合が高かった。少年院出院時の引受人が養父母を含む両親である者、実父のみである者、実母のみである者の別（以下「引受人別」という。）の認識の差異については、有意差の認められる項目はなかった。

2 少年とその保護者（親子）間の認識のずれ

3-1-3 図は、非行の原因の認識について、少年とその保護者（以下、第3章及び第4章において「親子」という。）間の認識のずれを見たものである。少年、保護者それぞれの回答について「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」を「該当」に、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「非該当」の二つに統合した上で、親子間の認識のずれを見る。親子間で認識のずれが最も小さいものは、「自分〔子ども〕自身」であった。「友だち」、「被害者」及び「運」でも、大きなずれはないものの、「学校や職場」及び「家庭や家族」では、認識のずれが見られ、特に「家庭や家族」では、51.2%の親子が、少年は非行の原因とは認識していないにもかかわらず、保護者は非行の原因であったと認識していた。

3-1-3図 非行の原因についての認識（親子間の認識のずれ）



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。
 4 親子間の認識が一致している比率の高い順に、項目を並べ替えている。

第2節 非行への対応

本節では、以下に示した質問項目に対する回答に基づき、保護者が少年の問題行動に対してとった対応の仕方についての、保護者の認識及び少年の認識について見る。

第1回少年調査 Q4の一部

これまでのあなたの保護者について、次の事柄はどのくらい当てはまると思いますか。

- ① 自分の生活の変化や非行に気がついていなかった
 - ② 自分の生活の変化や問題のある行動について、注意や指導してくれた
- 選択肢 とてもそう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、まったくそう思わない

第1回保護者調査 Q2

少年院入院前のお子さんの生活や態度の変化や、問題のある行動に対して、どうしていましたか。一番近いと思う答えを一つ選んで回答欄に番号を記入して下さい。

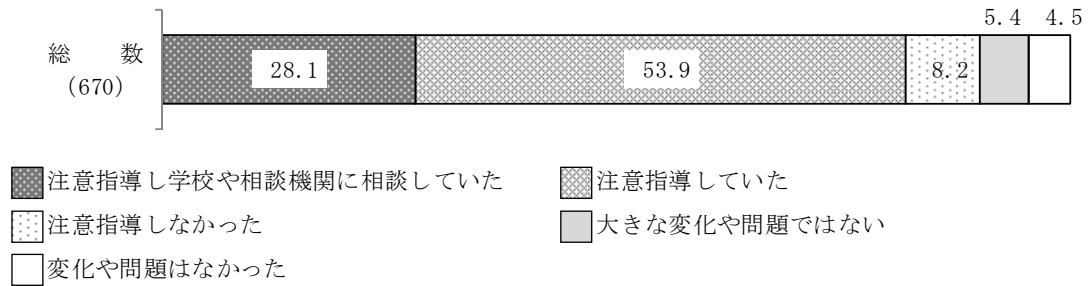
- 1 注意や指導をすると共に、学校や相談機関に相談をしていた
- 2 注意や指導をしていた
- 3 気になっていたが、注意や指導はしなかった（又はできなかった）
- 4 注意や指導をするほどの大きな変化や問題だとは考えていなかった
- 5 特に変化や問題はなかった（又は気がつかなかった）

1 保護者の認識

3-2-1 図は、本件非行に至るまでの少年の生活や態度の変化、問題のある行動に対する当時の保護者の対応について、保護者自身の認識を見たものである。

全体では、「注意指導し、学校や相談機関に相談していた」と「注意指導していた」を合わせると、81.9%の保護者が指導や注意をしていた。

3-2-1 図 非行への保護者の対応



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者総数である。

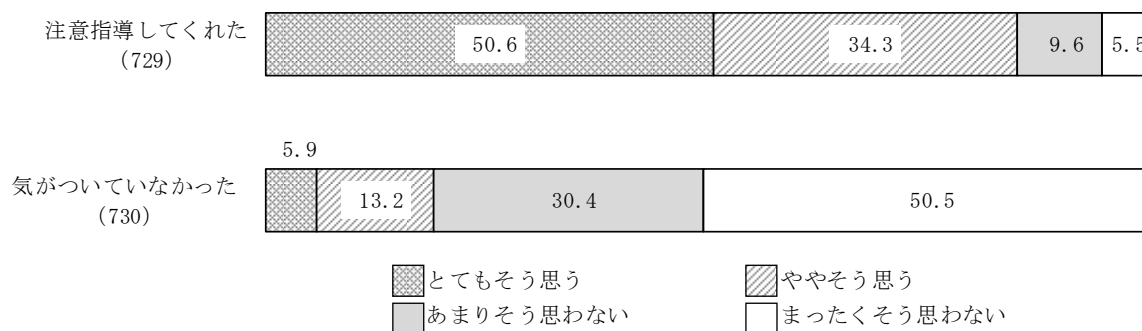
非行への対応に関する保護者の認識について、少年の男女別、非行進度別及び引受人別の認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、有意差は認められなかった（巻末資料 3-2 参照）。

2 少年の認識

3-2-2 図は、本件非行に至るまでの保護者の対応について、少年がどのように認識していたのかを見たものである。

生活の変化や問題のある行動について「注意指導してくれた」では、84.9%の少年が「とてもそう思う」又は「ややそう思う」と回答している。一方、自分の生活の変化や非行に「気がついていなかった」では、19.0%の少年が「とてもそう思う」又は「ややそう思う」と回答している。

3-2-2図 保護者の対応についての少年の認識



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

保護者の対応について、少年の男女別、非行進度別及び引受人別に、少年の認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、有意差が認められたのは、非行進度別で1項目（「気がついていなかった」）であり、長期処遇（初入）の少年で、「ややそう思う」の割合が高く、長期処遇（再入）の少年では「まったくそう思わない」の割合が高かった（巻末資料 3-2 参照）。

第3節 出院時の不安と実際に直面した問題

本節では、以下に示した質問項目に対する回答に基づき、出院時の不安と出院から6か月間に直面した問題について見る。

第1回少年調査 Q2

これから先の生活について、不安に思うことはありますか。

第1回保護者調査 Q3

少年院出院後のお子さんの生活について不安に思うことはありますか。

① 仕事を見つけること又は進学（復学）について

- ② 仕事又は学校を続けることについて
- ③ 家族とうまく生活していくことについて
- ④ 被害者への謝罪や被害弁償について
- ⑤ 以前の不良仲間からの誘いについて
- ⑥ 非行や犯罪に関わっていない友だちが作れるかについて
- ⑦ 保護観察官や保護司との関係について
- ⑧ 周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり，言われたりすることについて
- ⑨ 再非行をしてしまうことについて

選択肢 とても不安，やや不安，あまり不安ではない，まったく不安ではない

第2回少年調査 Q1

少年院出院後の生活で，問題になったことや困ったことはありましたか。

第2回保護者調査 Q1

少年院出院後のお子さんの生活で，問題になったことや困ったことはありましたか。

-
- ① 仕事を見つけること又は進学（復学）について
 - ② 仕事又は学校を続けることについて
 - ③ 家族とうまく生活していくことについて
 - ④ 被害者への謝罪や被害弁償について
 - ⑤ 以前の不良仲間からの誘いについて
 - ⑥ 非行や犯罪に関わっていない友だちを作ることについて
 - ⑦ 保護観察官や保護司との関係について
 - ⑧ 周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり，言われたりすることについて
 - ⑨ 再非行をしてしまうことについて

選択肢 とてもあてはまる，ややあてはまる，あまりあてはまらない，まったくあてはまらない

なお、本節においては、質問の回答結果の記載に当たり、質問項目①から順に以下のとおり要約した表現を用いた。

- ①「就職等」，②「就労等継続」，③「家族関係」，④「被害者への謝罪等」，⑤「不良交友」，

⑥「新しい友だちを作ること」, ⑦「保護司等との関係」, ⑧「周囲の目」, ⑨「再非行」

1 出院時の不安

(1) 少年・保護者の認識

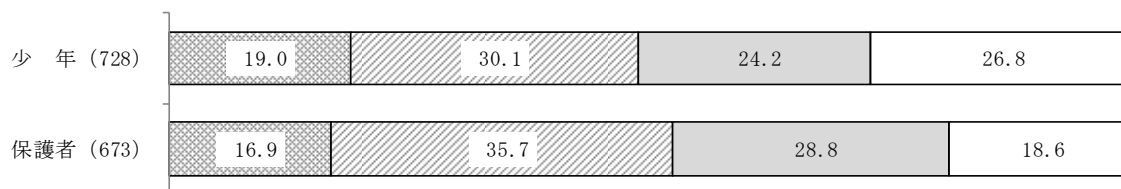
3-3-1 図は, 出院時における出院後の生活や更生に関する不安の認識について, 少年と保護者の別に見たものである。

少年自身が感じている出院時の不安で, 「とても不安」と「やや不安」を合わせた割合が最も高いのは, 「被害者への謝罪等」(54.0%) で, 次いで「不良交友」(51.2%) であった。保護者が感じている出院時の不安で, 「とても不安」と「やや不安」を合わせた割合が最も高いのは, 「不良交友」(69.8%) で, 次いで「再非行」(56.6%) であった。「とても不安」と「やや不安」を合わせた割合が最も低いのは, 少年, 保護者共に「保護司等との関係」(少年 30.0%, 保護者 12.6%) であった。

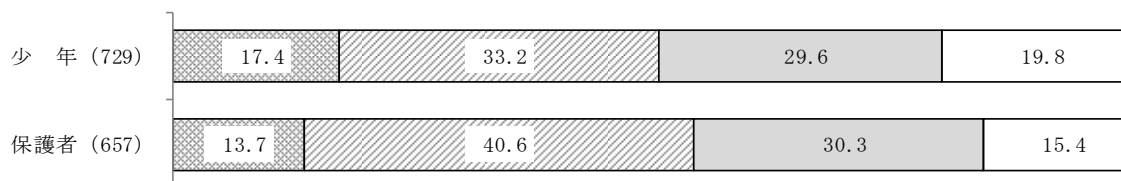
出院時に感じている不安について, 少年と保護者の認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ, 9 項目全てにおいて有意差が認められたが, 保護者は, 少年と比較して「再非行」, 「就職等」, 「就労等継続」, 「不良交友」といった少年自身に関する項目で不安を感じており, 特に「不良交友」について不安に思っている者が多かった。一方, 少年は, 保護者と比べて「被害者への謝罪等」や「家族関係」について不安に思っている者が多かった。

3-3-1 図 少年院出院時の不安 (少年・保護者別)

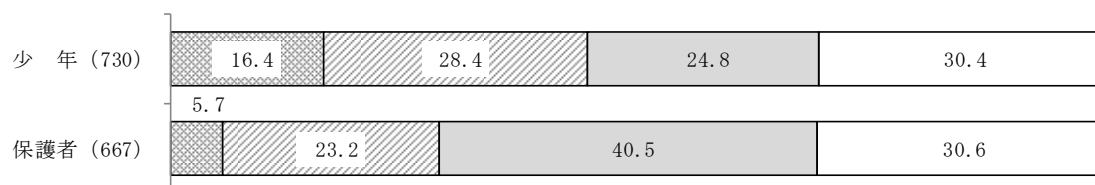
① 就職等 ($\chi^2(3)=17.302^{***}$)



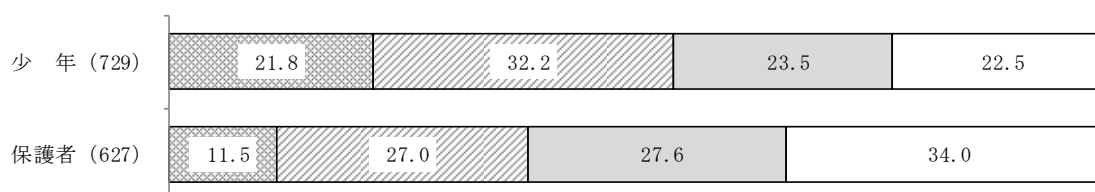
② 就労等継続 ($\chi^2(3)=12.072^{**}$)



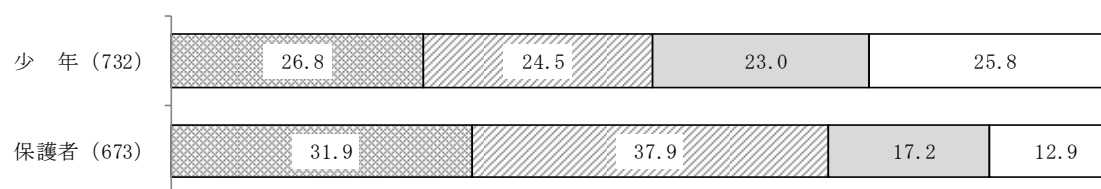
③ 家族関係 ($\chi^2(3)=65.643^{***}$)



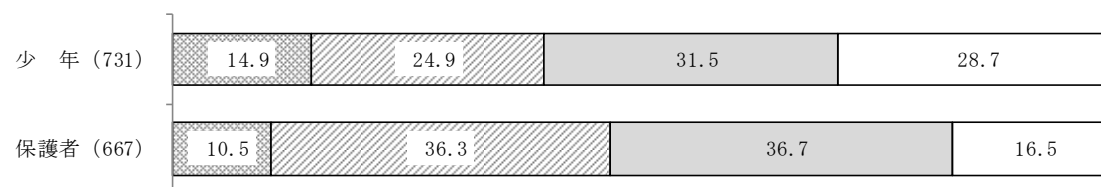
④ 被害者への謝罪等 ($\chi^2(3)=42.497^{***}$)



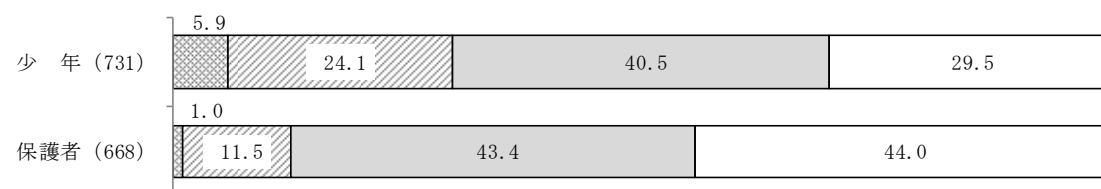
⑤ 不良交友 ($\chi^2(3)=59.030^{***}$)



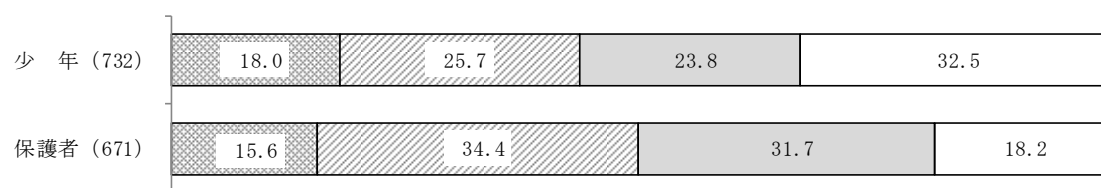
⑥ 新しい友だちを作ること ($\chi^2(3)=45.878^{***}$)



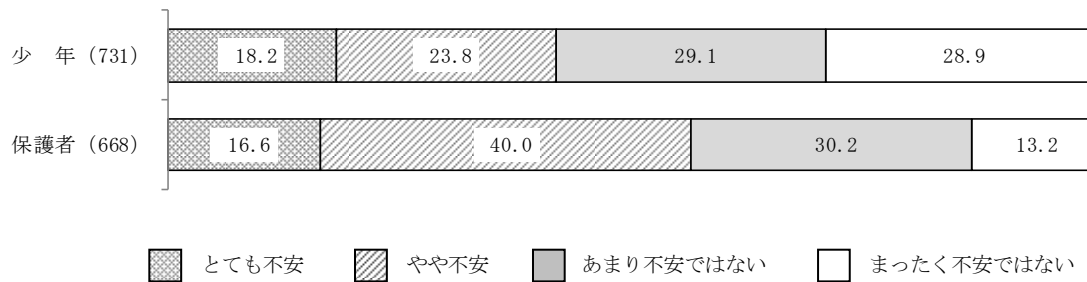
⑦ 保護司等との関係 ($\chi^2(3)=73.963^{***}$)



⑧ 周囲の目 ($\chi^2(3)=46.232^{***}$)



⑨ 再非行 ($\chi^2(3)=69.791^{***}$)



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

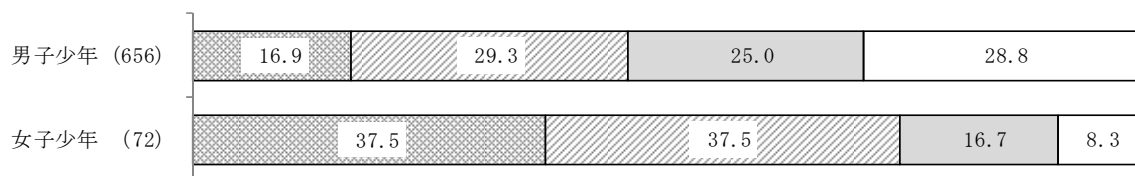
3-3-2 図は、出院時の不安について、少年の男女別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析したものである。

男子少年と女子少年では、「不良交友」以外の項目で有意差が認められ、男子少年の保護者と女子少年の保護者では3項目（「就職等」、「就労等継続」、「家族関係」）で有意差が認められた。総じて、女子少年及び女子少年の保護者は、男子少年及び男子少年の保護者と比べて不安に思っている割合が高いと言える。

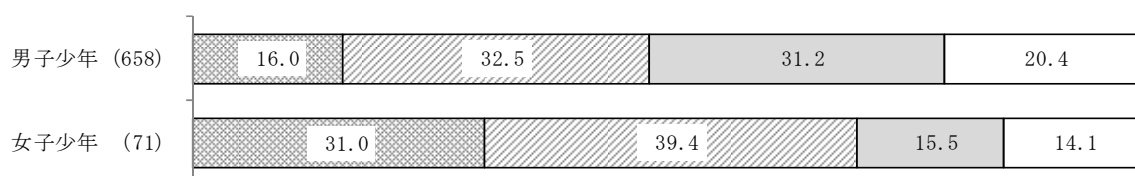
3-3-2 図 少年院出院時の不安（男女別）

① 男子少年・女子少年別

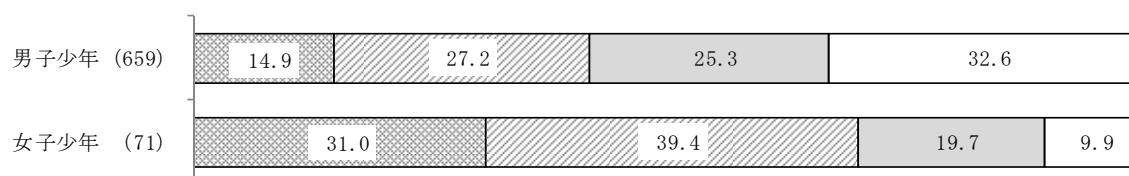
就職等 ($\chi^2(3)=27.977^{***}$)



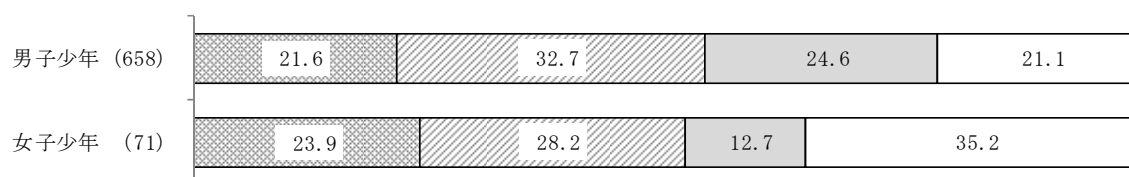
就労等継続 ($\chi^2(3)=15.816^{**}$)



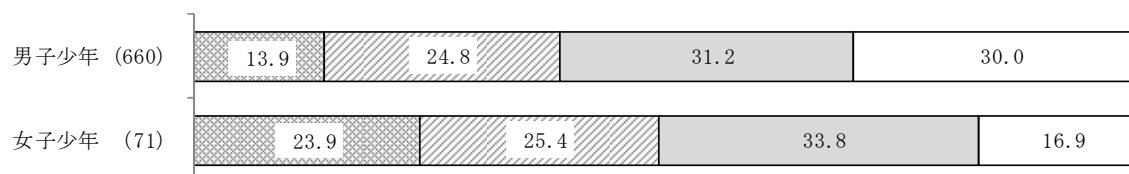
家族関係 ($\chi^2(3)=25.272^{***}$)



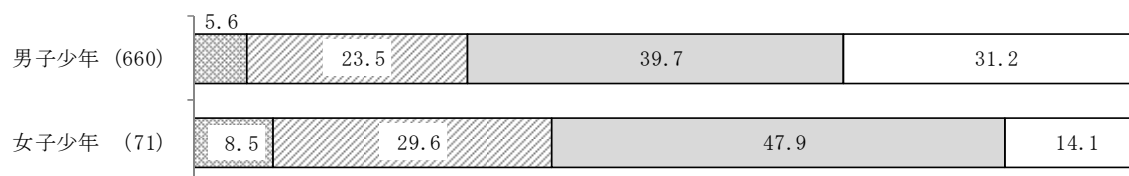
被害者への謝罪等 ($\chi^2(3)=10.118^*$)



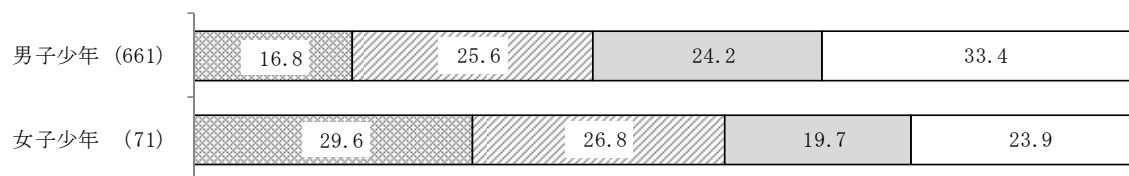
新しい友だちを作ること ($\chi^2(3)=8.275^*$)



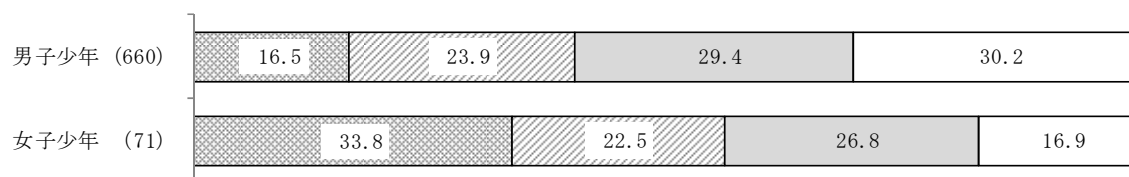
保護司等との関係 ($\chi^2(3)=9.296^*$)



周囲の目 ($\chi^2(3)=8.166^*$)

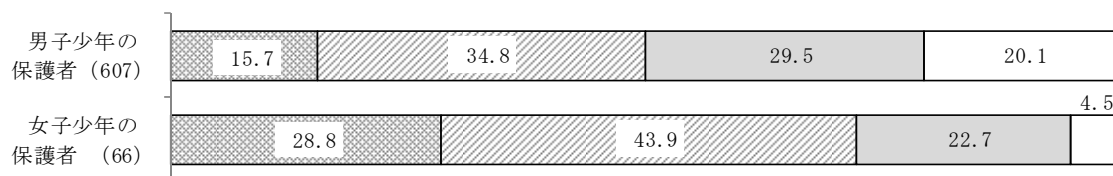


再非行 ($\chi^2(3)=14.635^{**}$)

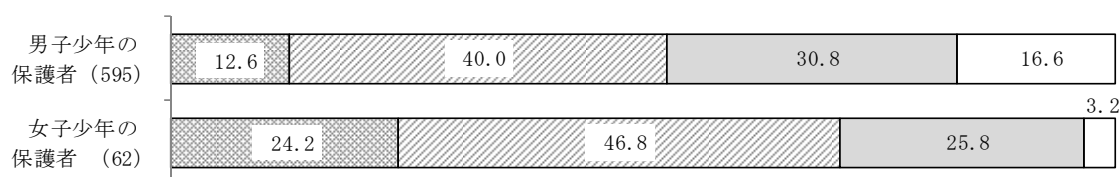


② 男子少年の保護者・女子少年の保護者別

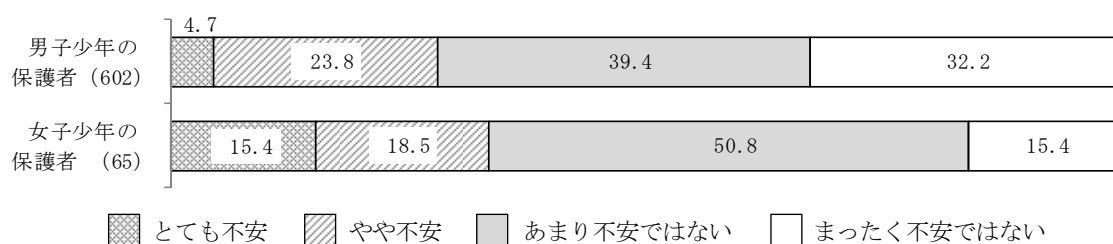
就職等 ($\chi^2(3)=16.168^{**}$)



就労等継続 ($\chi^2(3)=13.164^{**}$)



家族関係 ($\chi^2(3)=19.894^{***}$)



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

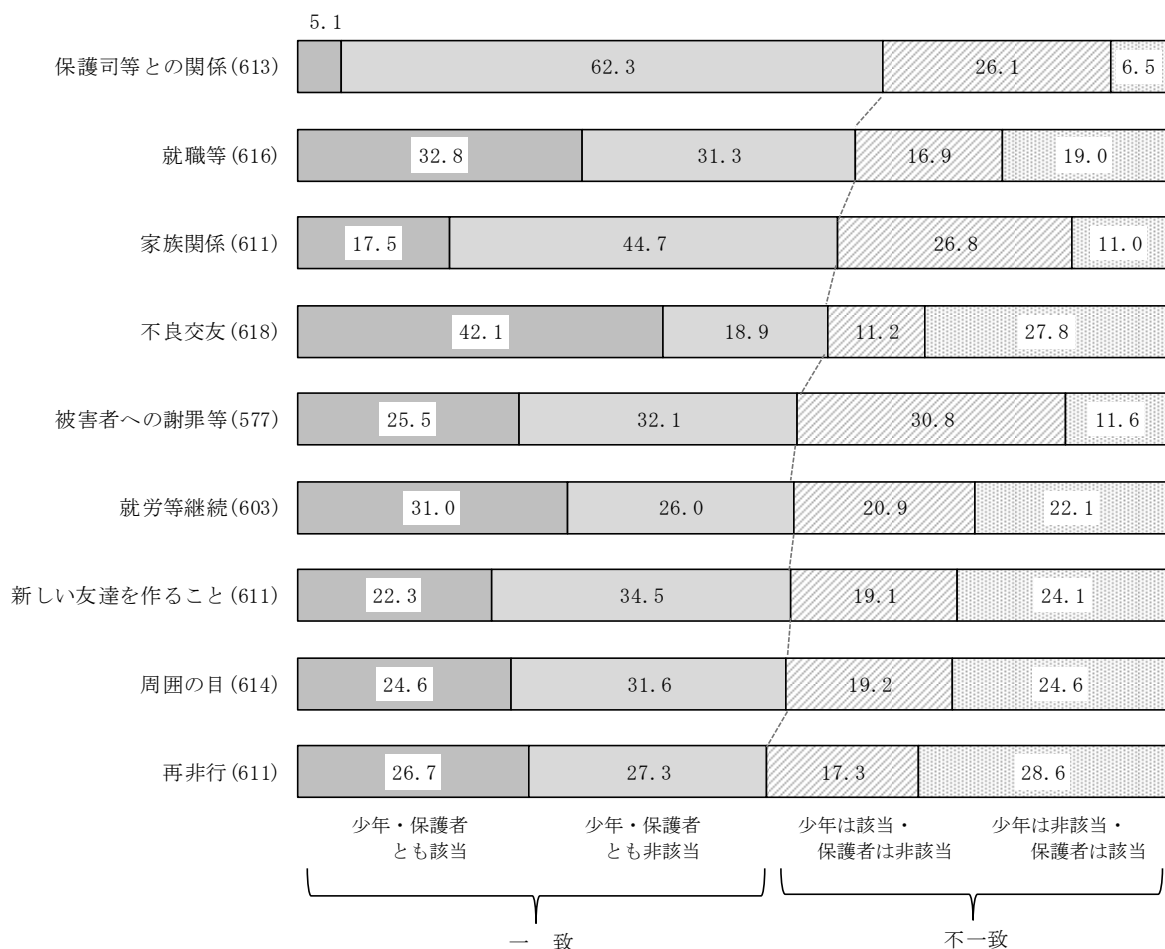
また、出院時の不安について、非行進度別、引受人別、虐待歴の有無別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析した結果は、巻末資料 3-3 のとおりである。非行進度別では、少年は 6 項目（「就職等」、「家族関係」、「被害者への謝罪等」、「保護司等との関係」、「周囲の目」、「再非行」）で、保護者は 2 項目（「就職等」、「周囲の目」）で、それぞれ有意差が認められた。少年、保護者で共に有意差があった「就職等」、「周囲の目」について見てみると、「就職等」では、短期処遇の少年は、他の少年と比べて「まったく不安ではない」の割合が高いが、短期処遇の少年の保護者は、他の保護者と比べて「とても不安」の割合が高く、少年と保護者で有意差の現れ方が異なっていた。一方、「周囲の目」では、長期処遇（再入）の少年・保護者共に他の少年・保護者と比べて「まったく不安ではない」の割合が高かった。虐待歴の有無別では、被虐待歴のある少年は、「家族関係」について、「とても不安」の割合が他の少年に比

べて高かったが、保護者では、虐待歴のある少年の保護者は「あまり不安でない」の割合が高く、認識の差異が認められた。

(2) 認識のずれ

3-3-3 図は、出院後の生活や更生への不安について、親子間の認識のずれを見たものである。「再非行」では2組に1組の親子に認識にずれがあり、出院時の再非行に対する不安感は必ずしも一致しているわけではないことがうかがえる。親子間で認識のずれが小さく、かつ不安感が最も少ないのは「保護司等との関係」であり、62.3%の親子が不安を抱いていない。

3-3-3 図 出院時の不安（親子間の認識のずれ）



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。
 4 親子間の認識が一致している比率が高い順に、項目を並べ替えている。

2 出院後に直面した問題

(1) 少年・保護者の認識

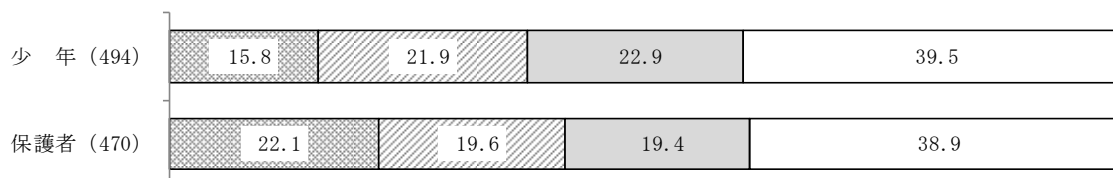
3-3-4 図は、少年院出院から6か月間に直面した生活や更生に関する問題について、少年と保護者の認識を見たものである。

少年院出院から6か月間に直面した生活や更生に関する問題を示す選択肢について、少年が「とてもあてはまる」又は「ややあてはまる」と回答したものは、「就労等継続」(39.8%)が最も高く、次いで「就職等」(37.7%)である。出院から6か月間で、生活や更生に関する問題に直面したことがある少年の割合は4割を下回っており、出院時に不安に思っていたほどには、実際には問題に直面していないことがうかがえる。特に出院時には51.2%の少年が不安に思っていた「不良交友」については、実際に直面した少年は19.5%であった。保護者では、「とてもあてはまる」又は「ややあてはまる」と回答したものは、「就職等」(41.7%)が最も高く、次いで「就労等継続」(40.0%)であり、出院時に不安を感じていた割合と比べると、前者で10.9pt、後方で14.4pt 低い。その他の項目でも、出院時不安に思っていたほどには、実際には問題に直面していないことがうかがえるが、「家族関係」と「保護司等との関係」については実際に問題に直面した割合が、それぞれ6.6pt、7.1pt 高くなっている。

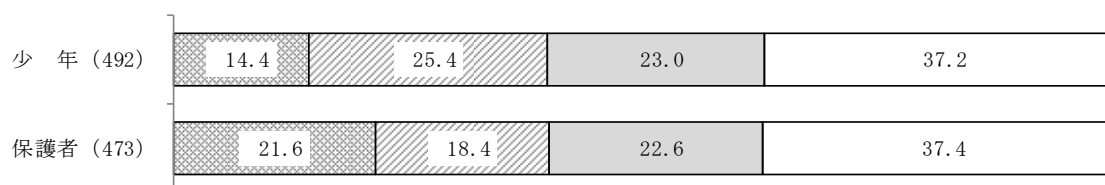
出院後に直面した問題について、少年と保護者の認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、9項目のうち6項目(「就労等継続」、「被害者への謝罪等」、「不良交友」、「新しい友達を作ること」、「周囲の目」、「再非行」)において有意差が認められた。総じて割合は大きくないものの、保護者は少年と比べて、「再非行」、「就労・就学」、「交友関係」といった少年自身に関する項目において、生活や更生に関する問題があったと感じている傾向がうかがわれる。

3-3-4 図 出院6か月間で直面した問題 (少年・保護者別)

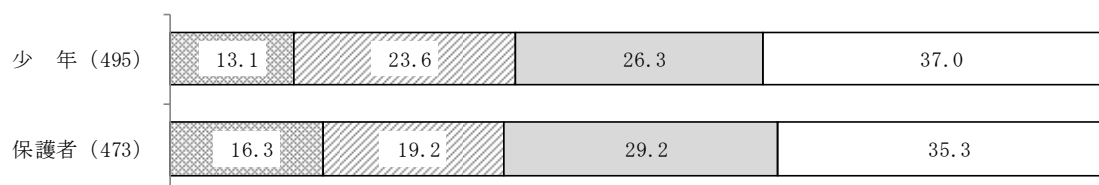
① 就職等 ($\chi^2(3)=7.155, n.s.$)



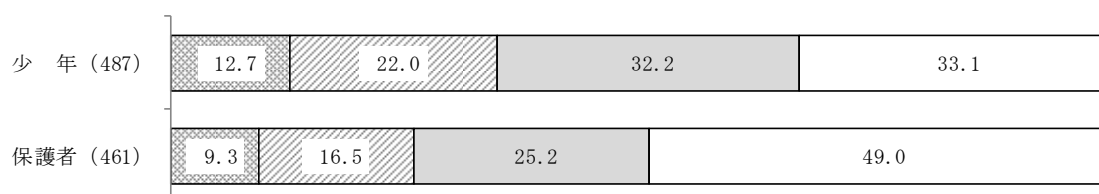
② 就労等継続 ($\chi^2(3)=12.261^{**}$)



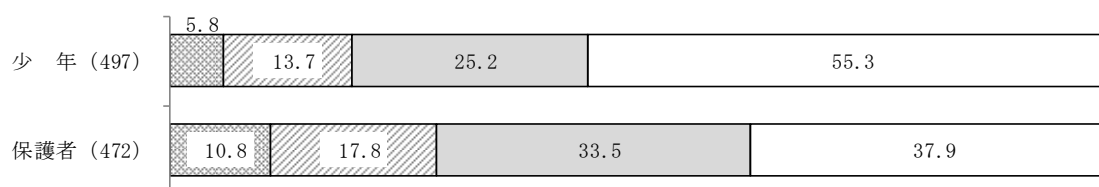
③ 家族関係 ($\chi^2(3)=4.737$, n. s.)



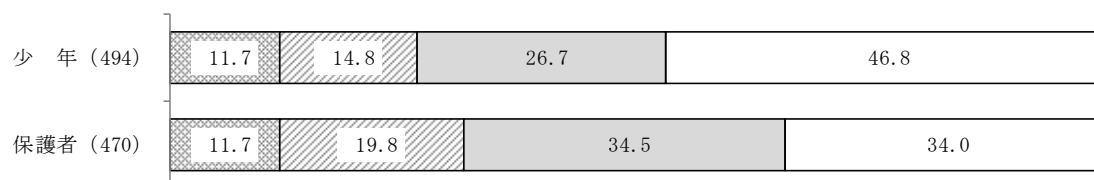
④ 被害者への謝罪等 ($\chi^2(3)=25.070^{***}$)



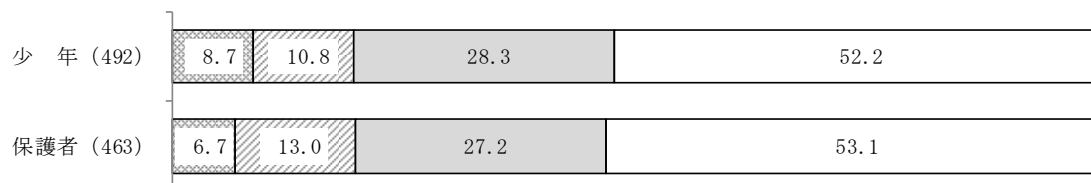
⑤ 不良交友 ($\chi^2(3)=31.258^{***}$)



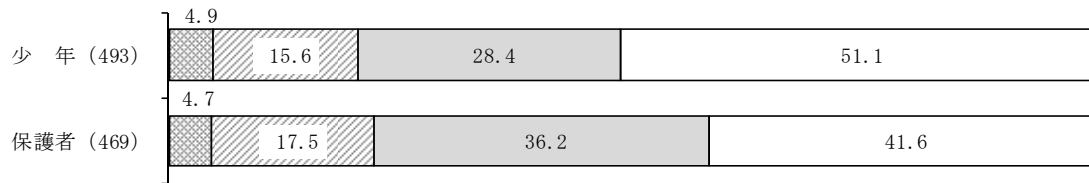
⑥ 新しい友達を作ること ($\chi^2(3)=17.857^{***}$)



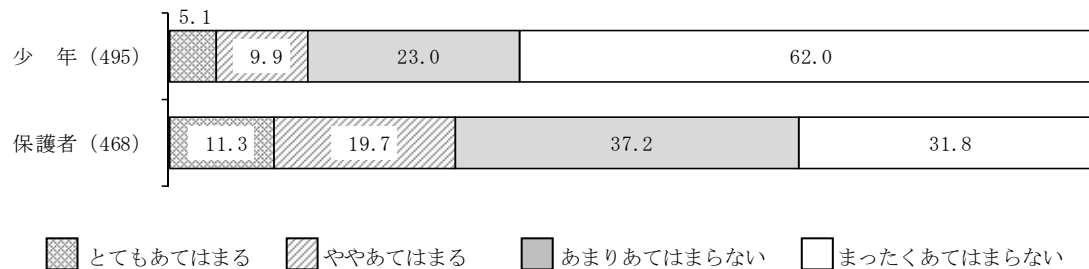
⑦ 保護司等との関係 ($\chi^2(3)=2.379$, n. s.)



⑧ 周囲の目 ($\chi^2(3)=9.823^*$)



⑨ 再非行 ($\chi^2(3)=89.724^{***}$)



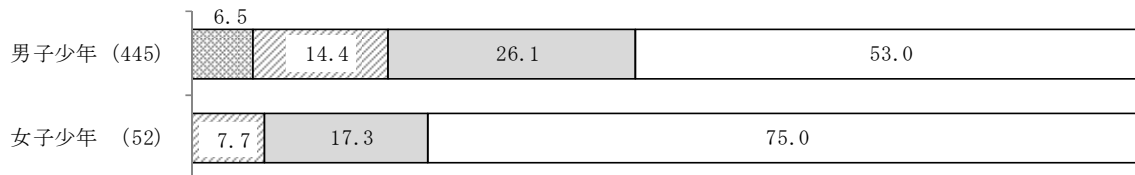
- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

3-3-5 図は、少年院出院から6か月間に直面した生活や更生に関する問題について、少年の男女別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析したものである。少年の男女別では1項目（「不良交友」）で有意差が認められ、女子少年は男子少年に比べて、「まったくあてはまらない」の割合が高かった。出院時には、女子少年は男子少年に比べ、全般的に不安が大きい傾向が見られたが、実際に直面した問題についての認識では有意差はほとんど認められなかった。少年院出院時において、女子少年の保護者は、男子少年の保護者より全般的に不安が大きい傾向が見られたが、実際に直面した問題の認識においても、3項目（「就職等」、「家族関係」、「保護司等との関係」）で有意差が認められ、女子少年の保護者は、男子少年の保護者より困難に直面していると感じている様子がうかがえる。

3-3-5図 出院後に直面した問題（男女別）

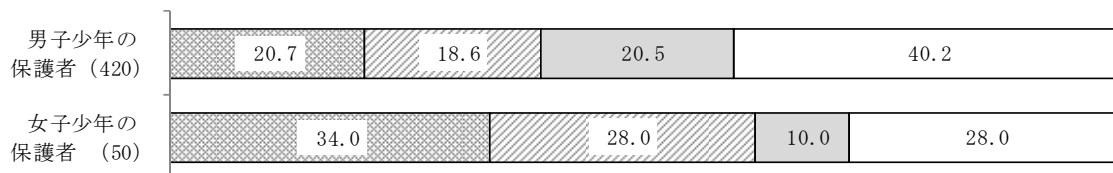
① 男子少年・女子少年別

不良交友 ($\chi^2(3)=10.392^*$)

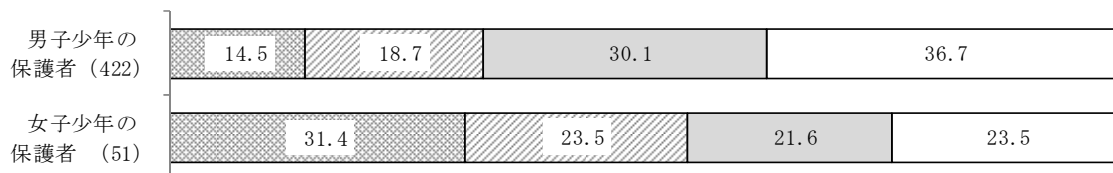


② 男子少年の保護者・女子少年の保護者別

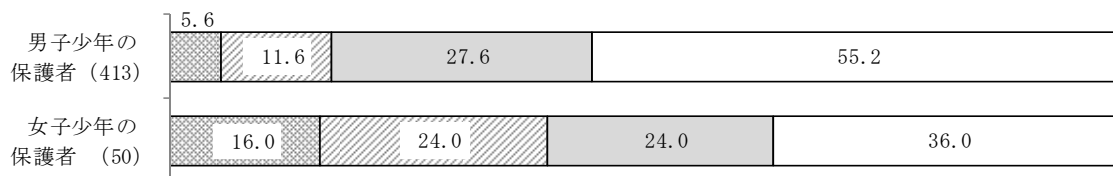
就職等 ($\chi^2(3)=9.845^*$)



家族関係 ($\chi^2(3)=11.926^{**}$)



保護司等との関係 ($\chi^2(3)=15.830^{**}$)



とてもあてはまる
 ややあてはまる
 あまりあてはまらない
 まったくあてはまらない

注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

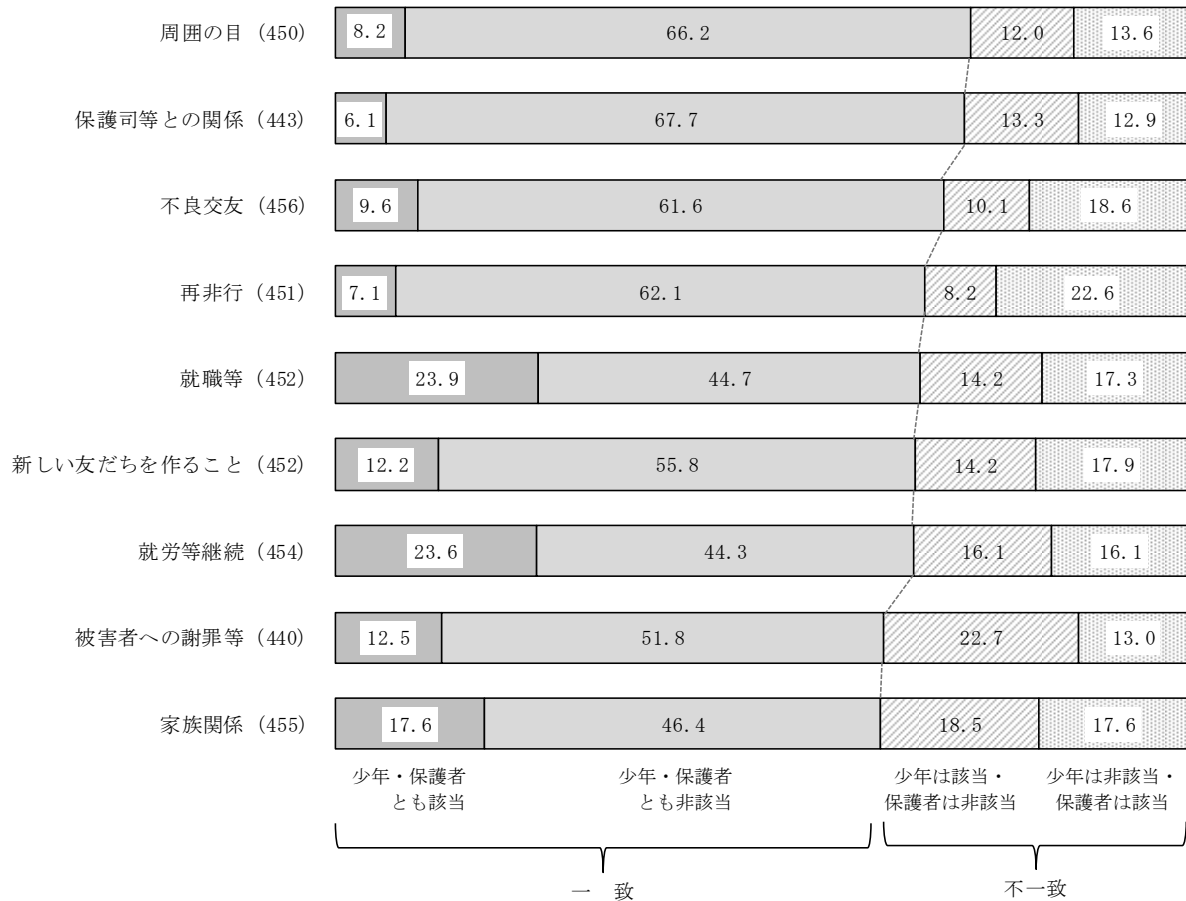
また、出院後に直面した問題について、非行進度別、引受人別、虐待歴の有無別に、少年、保

護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析した結果は、巻末資料 3-4 のとおりである。非行進度別では、短期処遇の少年は、他の非行進度の少年と比べて「家族関係」で「まったくあてはまらない」の割合が高かった。引受人別では、引受人が実母のみである少年は、他の引受人の場合と比べて「周囲の目」について「まったくあてはまらない」の割合が高かった。虐待歴の有無別では、被虐待歴のある少年は、他の少年に比べて「再非行」で「とてもあてはまる」の割合が高かった。

（２）少年とその保護者（親子間）の認識のずれ

3-3-6 図は、少年院出院から 6 か月間に直面した生活や更生に関する問題について、親子間の認識のずれを見たものである。「周囲の目」で最も認識のずれが小さく、66.2%の親子が、周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり、言われたりしたことはなかったと回答している。「家族関係」に関する認識のずれは 36.1%の親子に見られた。出院時からの 6 か月間に実際に直面した問題等があったか否かについて、認識が一致していた親子の割合は、6 割ないし 7 割にとどまっている。

3-3-6 図 出院後に直面した問題（親子間の認識のずれ）



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。
 4 親子間の一致率の高い順に、項目を並べ替えている。

3 出院時の不安と実際に直面した問題のずれ

3-3-7 表は、第1回及び第2回の調査に回答した少年と保護者を対象に、出院時に感じていた出院後の生活や更生への不安について、出院から6か月間に実際に直面したかどうかを見たものである。少年、保護者のそれぞれの回答について、第1回調査の「とても不安」と「やや不安」とを合わせたものを「不安あり」に、「あまり不安ではない」と「まったく不安ではない」とを合わせたものを「不安なし」にし、第2回調査の「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」とを合わせたものを「現実あり」に、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」とを合わせたものを「現実なし」にそれぞれまとめて表記している。

出院時には不安を感じていなかったものの、出院後に直面した問題は、少年、保護者共に「家族関係」の割合が最も高かった。また、出院時に不安を感じていたにもかかわらず、回避できなかった問題として多かったものの上位二つは、少年では、「被害者への謝罪等」(24.8%)、「就職等」(24.0%)であり、保護者では、「就職等」(29.9%)、「就労等継続」(27.7%)であった。

3-3-7表 出院時の不安と実際に直面した問題のずれ（少年・保護者別）

① 少年

	人 数 (構成比)	不安なし・現実なし	不安あり・現実なし	不安あり・現実あり	不安なし・現実あり
就職等	454 (100.0)	170 (37.4)	116 (25.6)	109 (24.0)	59 (13.0)
就労等継続	452 (100.0)	147 (32.5)	123 (27.2)	107 (23.7)	75 (16.6)
家族関係	454 (100.0)	188 (41.4)	99 (21.8)	85 (18.7)	82 (18.1)
被害者への謝罪等	447 (100.0)	163 (36.5)	129 (28.9)	111 (24.8)	44 (9.8)
不良交友	458 (100.0)	183 (40.0)	182 (39.7)	56 (12.2)	37 (8.1)
新しい友達を作ること	455 (100.0)	215 (47.3)	117 (25.7)	70 (15.4)	53 (11.6)
保護司等との関係	453 (100.0)	266 (58.7)	101 (22.3)	33 (7.3)	53 (11.7)
周囲の目	454 (100.0)	214 (47.1)	143 (31.5)	65 (14.3)	32 (7.0)
再非行	455 (100.0)	224 (49.2)	163 (35.8)	36 (7.9)	32 (7.0)

② 保護者

	人 数 (構成比)	不安なし・現実なし	不安あり・現実なし	不安あり・現実あり	不安なし・現実あり
就職等	435 (100.0)	147 (33.8)	105 (24.1)	130 (29.9)	53 (12.2)
就労等継続	430 (100.0)	141 (32.8)	116 (27.0)	119 (27.7)	54 (12.6)
家族関係	432 (100.0)	221 (51.2)	55 (12.7)	64 (14.8)	92 (21.3)
被害者への謝罪等	404 (100.0)	203 (50.2)	87 (21.5)	65 (16.1)	49 (12.1)
不良交友	437 (100.0)	112 (25.6)	199 (45.5)	107 (24.5)	19 (4.3)
新しい友達を作ること	433 (100.0)	180 (41.6)	114 (26.3)	81 (18.7)	58 (13.4)
保護司等との関係	427 (100.0)	302 (70.7)	38 (8.9)	11 (2.6)	76 (17.8)
周囲の目	434 (100.0)	178 (41.0)	157 (36.2)	63 (14.5)	36 (8.3)
再非行	430 (100.0)	154 (35.8)	141 (32.8)	95 (22.1)	40 (9.3)

注 法務総合研究所の調査による。

第4節 更生支援的行動

本節では、以下に示した質問項目に対する回答に基づき、保護者の更生支援的な行動について見る。

第1回少年調査 Q5

次の事柄について、これからの生活で保護者が変わってくれることを、あなたはどのくらい期待していますか。

第1回保護者調査 Q6

次の事柄について、これからの生活でお子さんのためにしていこうと思っていることはありますか。

-
- ① 一緒に食事をする機会をもっと増やすこと
 - ② 話す機会をもっと増やすこと
 - ③ 家の片付けをするなど、生活の環境をよくすること
 - ④ 就職先の紹介や学校への入学手続など、具体的な支援をしてくれること〔すること〕
 - ⑤ 問題のある〔これまでの〕接し方や保護者自身の欠点を改めること
 - ⑥ 自分〔子ども〕が頑張っているときに、ほめたり、励ましたりして、頑張りを認めてくれること〔認めること〕
 - ⑦ 家庭内での争いを少なくするなど、家庭の問題を解決してくれること〔すること〕
 - ⑧ 再非行しないよう注意や指導をしてくれること〔すること〕
-

少年選択肢：とても期待している、やや期待している、あまり期待していない、まったく期待していない、満足しているので変わる必要はない

保護者選択肢：とても思う、やや思う、あまり思わない、まったく思わない、十分しているので変える必要はない

第2回少年調査 Q4

次の事柄について、出院後に保護者がしてくれたことはありますか。

第2回保護者調査 Q4

次の事柄について、少年院出院後にお子さんのためにしたことはありますか。

- ① 一緒に食事をする機会を増やしてくれた〔増やした〕
- ② 話す機会を増やしてくれた〔増やした〕
- ③ 家の片付けをするなど、生活の環境をよくしてくれた〔よくした〕
- ④ 就職先の紹介や学校への入学手続など、具体的な支援をしてくれた〔支援をした〕
- ⑤ 問題のある接し方や親自身〔これまでの接し方や保護者自身〕の欠点を改めてくれた〔改めた（又は改める努力をした）〕
- ⑥ 自分〔子ども〕が頑張っているときに、ほめたり、励ましたりして、頑張りを認めてくれた〔認めた〕
- ⑦ 家庭内での争いを少なくするなど、家庭の問題を解決してくれた（又は、努力をしてくれた）〔解決した（又は、解決する努力をした）〕
- ⑧ 再非行をしないように注意や指導をしてくれた〔指導をした〕

選択肢：とてもあてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない

注 〔 〕は、少年と保護者の調査項目の表現に違いがある場合の、保護者の調査項目の表現である。

なお、本節においては、質問の回答結果の記載に当たっては、質問項目①から順に以下のとおり要約した表現を用いた。

①「食事の機会を増やす」、②「会話の機会を増やす」、③「生活環境を整える」、④「具体的な支援をする」、⑤「欠点を改める」、⑥「頑張りを認める」、⑦「家庭の問題を解決する」、⑧「再非行を防止する」

1 出院時の少年の期待と保護者の意識

3-4-1 図は、少年院出院後の生活における更生支援的行動について、少年院出院時の少年の期待と保護者の意識を見たものである。

これからの生活の中で、少年が期待している事柄を示す選択肢のうち「とても期待している」

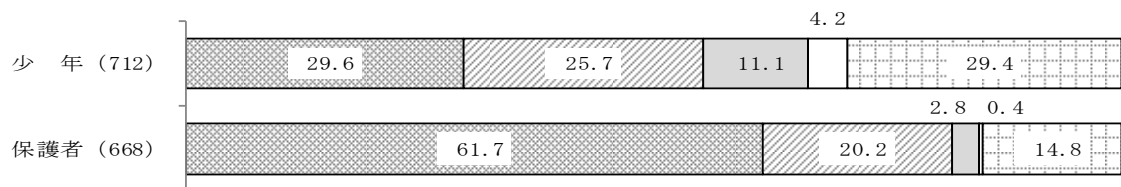
と「やや期待している」を合わせた割合が最も高いのは、「会話の機会を増やす」(66.4%)で、次いで「再非行を防止する」(60.1%)である。保護者が、子どものためにしようと考えている更生支援的行動のうち、「とても思う」と「やや思う」を合わせた割合が最も高いのは、「再非行を防止する」(92.7%)で、次いで「頑張りを認める」(91.3%)であり、最も割合が低い「家庭の問題を解決する」でも72.0%の保護者がその必要性を考えている。

また、少年については各項目で「満足しているので変わる必要はない」が2割から3割を占めていたが、保護者では、「十分しているので変える必要はない」と考えている割合が最も高い「家庭の問題を解決する」でも15.8%であり、「欠点を改める」では、3.9%であった。

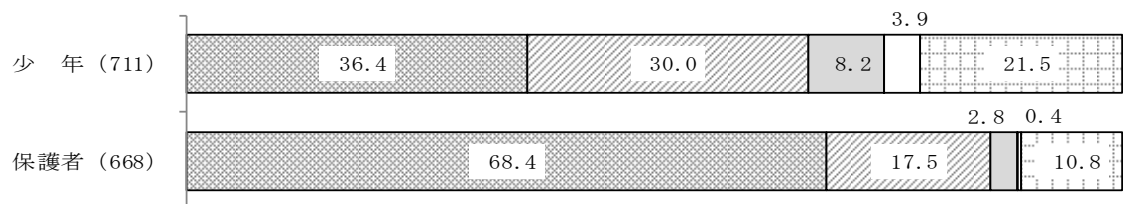
少年院出院後の生活における更生支援的行動について、少年の期待と保護者の意識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、8項目全てにおいて有意差が認められた。少年は、保護者の認識と比べて全般的に現状を肯定的に捉えているが、保護者は、現状をより厳しく評価し、今後は、少年の更生に資するよう、これまで以上に支援行動をしようと考えている様子がうかがえる。

3-4-1 図 更生支援的行動についての認識（出院時、少年・保護者別）

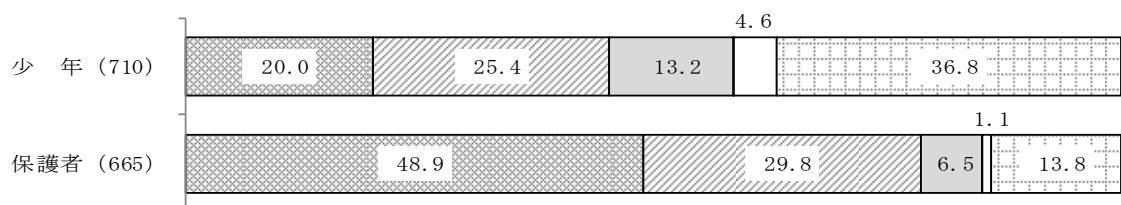
① 食事の機会を増やす ($\chi^2(4)=168.975^{***}$)



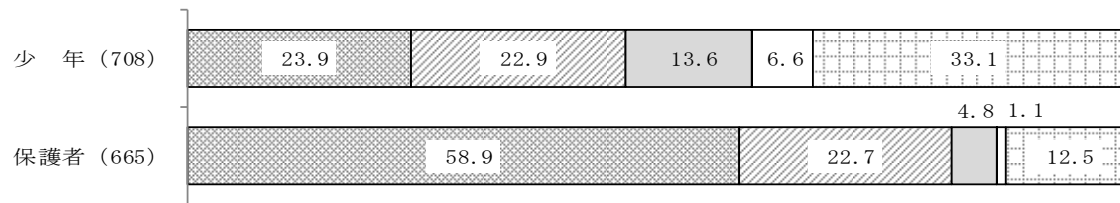
② 会話の機会を増やす ($\chi^2(4)=150.562^{***}$)



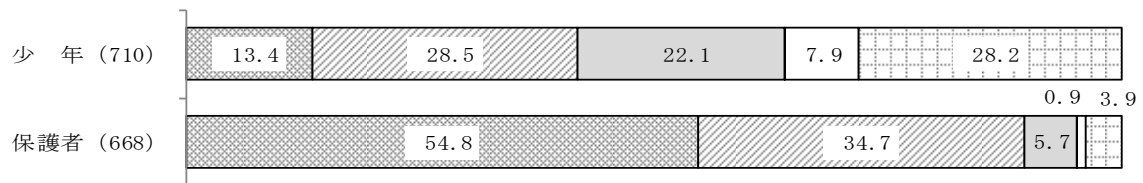
③ 生活環境を整える ($\chi^2(4)=188.092^{***}$)



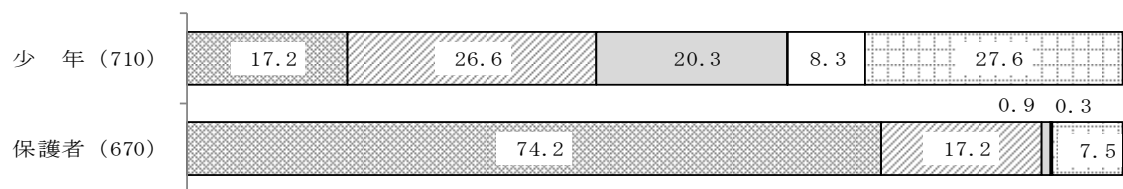
④ 具体的な支援をする ($\chi^2(4)=221.458^{***}$)



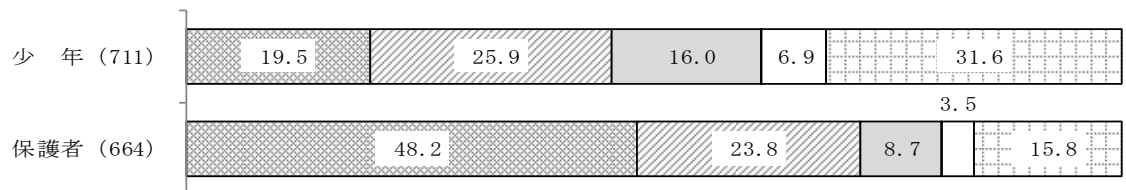
⑤ 欠点を改める ($\chi^2(4)=407.388^{***}$)



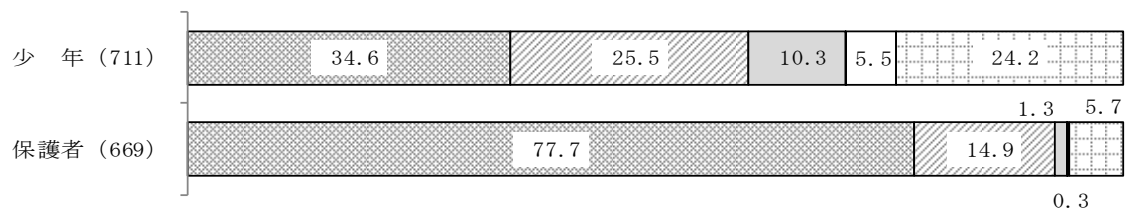
⑥ 頑張りを認める ($\chi^2(4)=511.337^{***}$)



⑦ 家庭の問題を解決する ($\chi^2(4)=143.170^{***}$)



⑧ 再非行を防止する ($\chi^2(4)=289.195^{***}$)



とても
 やや
 あまり
 まったく
 満足

- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 少年の回答の選択肢は、「とても期待している」、「やや期待している」、「あまり期待していない」、「まったく期待していない」、「満足しているので変える必要はない」である。
 4 保護者の回答の選択肢は、「とても思う」、「やや思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」、「十分しているので変える必要はない」である。
 5 () 内は、回答者数である。

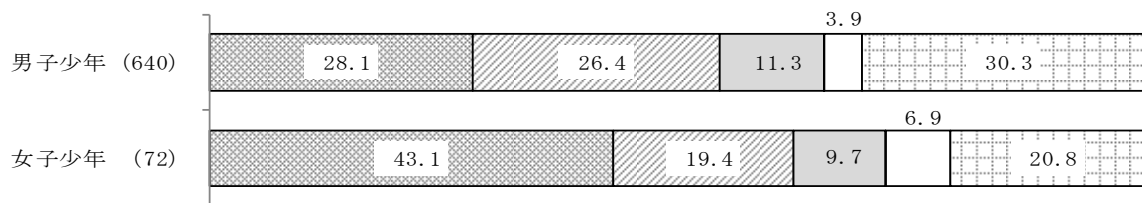
3-4-2 図は、少年院出院後の生活における更生支援的行動について、少年の男女別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析したものである。

男子少年は、女子少年に比べて現状に満足している傾向があり、女子少年は、保護者の更生支援的行動について、「食事の機会を増やす」、「頑張りを認める」ことなどを期待していることがうかがえる。

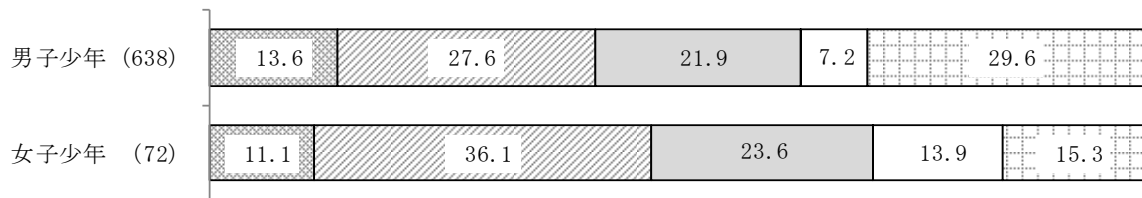
3-4-2 図 更生支援的行動についての認識（出院時、男女別）

① 男子少年・女子少年別

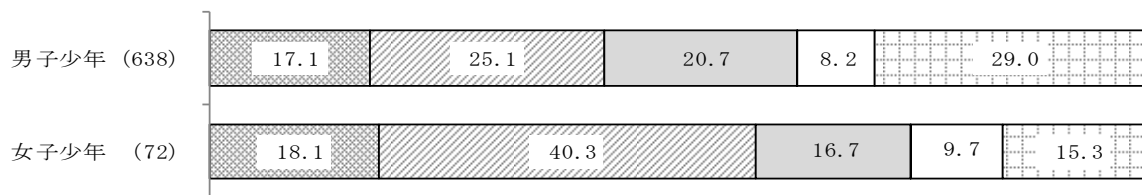
食事の機会を増やす ($\chi^2(4)=9.624^*$)



欠点を改める ($\chi^2(4)=10.428^*$)

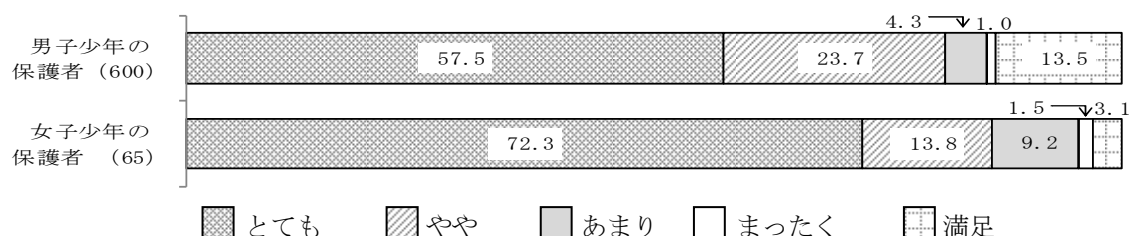


頑張りを認める ($\chi^2(4)=10.770^*$)



② 男子少年の保護者・女子少年の保護者別

具体的な支援をする ($\chi^2(4)=12.862^*$)



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 少年の回答の選択肢は、「とても期待している」、「やや期待している」、「あまり期待していない」、「まったく期待していない」、「満足しているので変える必要はない」である。
 4 保護者の回答の選択肢は、「とても思う」、「やや思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」、「十分しているので変える必要はない」である。

また、更生支援的行動について、非行進度別、引受人別、虐待歴の有無別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析した結果は、巻末資料 3-5 のとおりである。非行進度別では、少年は6項目（「会話の機会を増やす」、「具体的な支援をする」、「欠点を改める」、「頑張りを認める」、「家庭の問題を解決する」、「再非行を防止する」）で、保護者は2項目（「頑張りを認める」、「再非行を防止する」）で、それぞれ有意差が認められた。非行進度が進んだ少年ほど、保護者の更生支援を期待していない傾向がうかがわれたが、一方、非行進度にかかわらず7～8割程度の保護者は子どもに対して更生的支援を行おうとする意思がうかがわれ、両者に差異が見られた。引受人別では、少年の引受人に対する更生支援の期待には、有意差は認められなかったが、保護者の更生支援の意思について引受人別に見ると、4項目（「食事の機会を増やす」、「欠点を改める」、「頑張りを認める」、「家庭の問題を解決する」）で有意差が認められ、引受人が実父あるいは実母のみの保護者は、更生支援について、積極的に取り組もうとしている様子がうかがえる。虐待歴の有無別では、少年は3項目（「欠点を改める」、「家庭の問題を解決する」、「再非行を防止する」）で有意差が認められ、被虐待歴のある少年ほど、保護者の養育態度に満足はしておらず、期待もしていない様子がうかがわれた。保護者については、虐待歴の有無別で有意差の認められた項目はなかった。

2 出院から6か月間の更生支援的行動についての認識

(1) 少年・保護者の認識

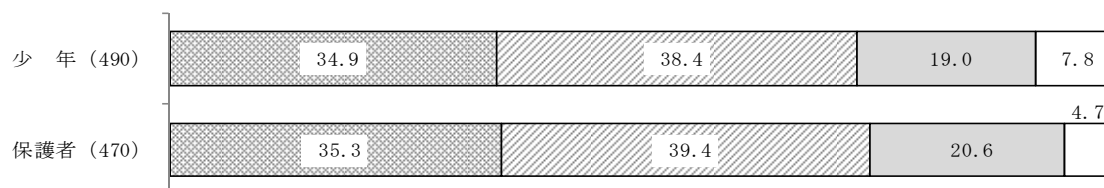
3-4-3 図は、少年院出院時からの6か月間の保護者の更生支援的行動について、少年と保護者の認識について見たものである。

出院からの6か月間の保護者の更生支援的行動を示す選択肢のうち、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」とを合わせた割合は、少年では、「再非行を防止する」(87.4%)が最も高く、次いで「会話の機会を増やす」及び「頑張りを認める」(78.5%)であった。保護者では、「再非行を防止する」(93.2%)が最も高く、次いで「頑張りを認める」(92.8%)であった。

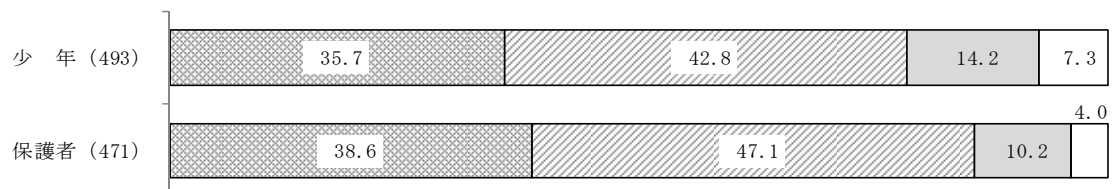
少年院出院後の生活における更生支援的行動について、少年と保護者の認識の差異を独立性の検定を用いて分析したところ、8項目中6項目(「会話の機会を増やす」、「生活環境を整える」、「欠点を改める」、「頑張りを認める」、「家庭の問題を解決する」、「再非行を防止する」)において有意差が認められた。特に「欠点を改める」、「頑張りを認める」において少年と保護者を比較すると、保護者は欠点を改めた、頑張りを認めた旨の回答をした割合が高かったが、少年は「あまりあてはまらない」又は「まったくあてはまらない」と回答した割合が高く、保護者と少年の認識に差異があった。

3-4-3 図 出院後の更生支援的行動についての認識 (少年・保護者別)

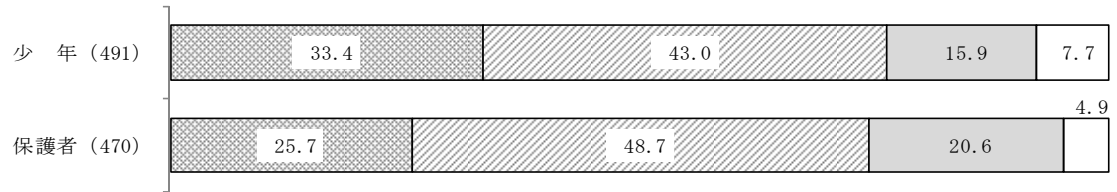
① 食事の機会を増やす ($\chi^2(3)=4.043$, n. s.)



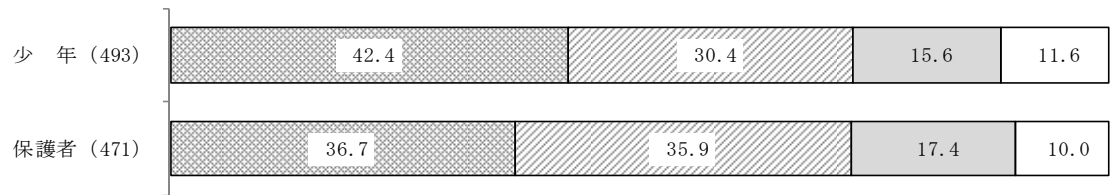
② 会話の機会を増やす ($\chi^2(3)=9.239^*$)



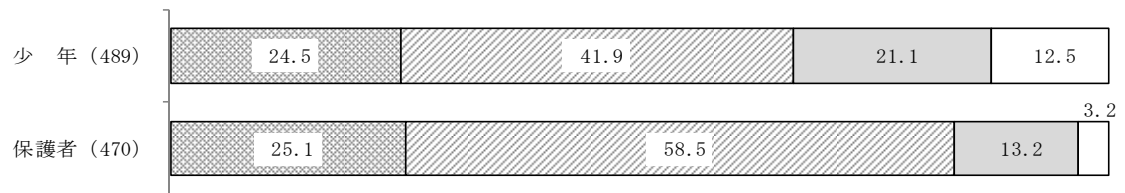
③ 生活環境を整える ($\chi^2(3)=12.523^{**}$)



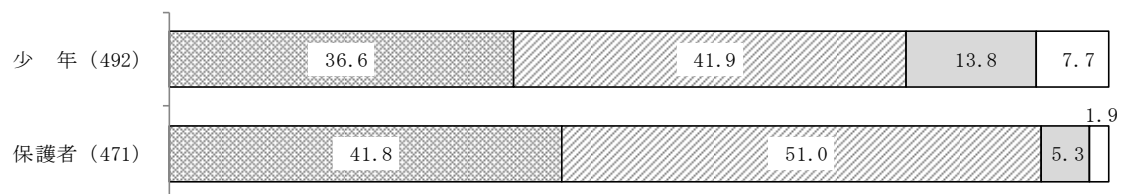
④ 具体的な支援をする ($\chi^2(3)=5.144, n. s.$)



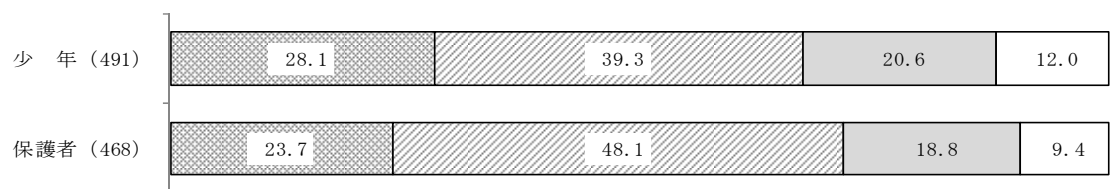
⑤ 欠点を改める ($\chi^2(3)=47.897^{***}$)



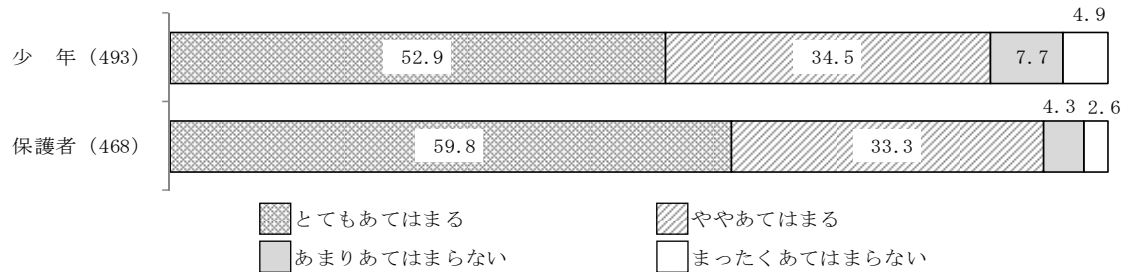
⑥ 頑張りを認める ($\chi^2(3)=40.695^{***}$)



⑦ 家庭の問題を解決する ($\chi^2(3)=7.909^*$)



⑧ 再非行を防止する ($\chi^2(3)=10.211^*$)



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

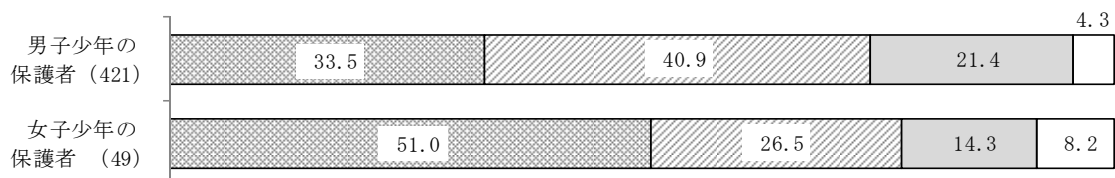
3-4-4 図は、少年院出院から6か月間の保護者の更生支援的行動について、少年の男女別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析したものである。

男子少年と女子少年では、有意差の認められた項目はなく、保護者の更生支援的行動に対する評価に、性別による異なった傾向は見られなかったが、男子少年の保護者と女子少年の保護者では2項目（「食事の機会を増やす」、「家庭の問題を解決する」）で有意差が認められ、女子少年の保護者は、男子少年の保護者と比べて、前記2項目の更生支援をしていると認識している割合が高かった（巻末資料3-6参照）。

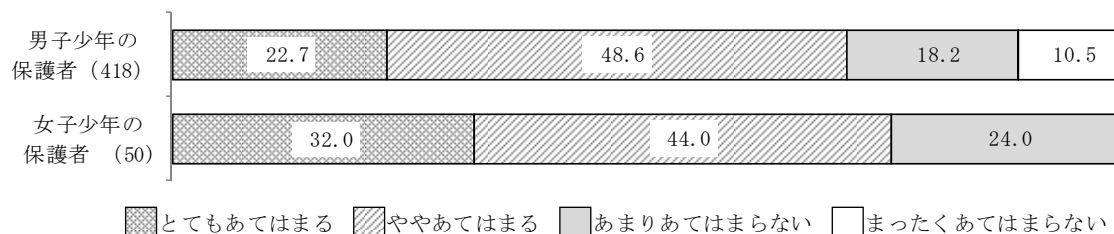
3-4-4 図 出院後の更生支援的行動についての認識（男女別）

男子少年の保護者・女子少年の保護者別

食事の機会を増やす ($\chi^2(3)=8.593^*$)



家庭の問題を解決する ($\chi^2(3)=7.880^*$)



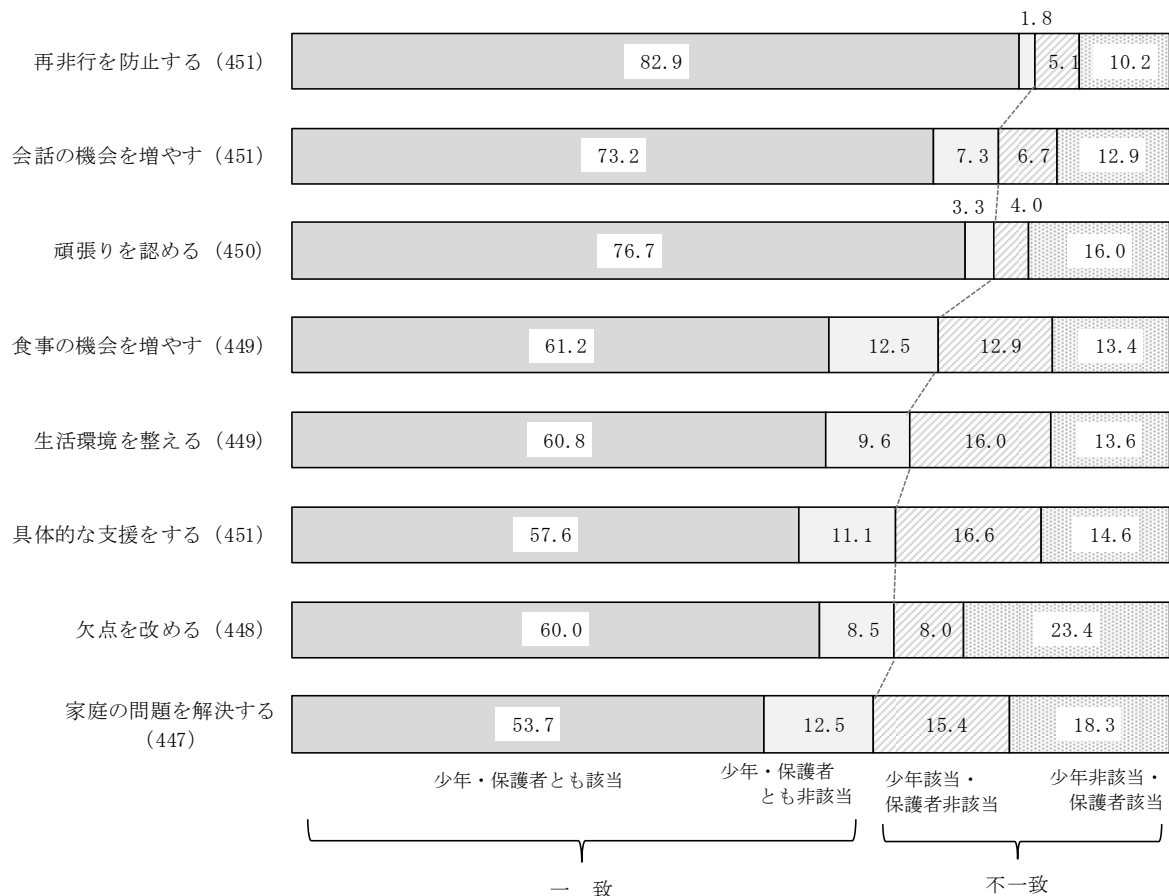
- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。

また、出院後の更生支援的行動について、非行進度別、引受人別、虐待歴の有無別に、少年、保護者のそれぞれの認識の差異を独立性の検定を用いて分析した結果は、巻末資料 3-6 のとおりである。引受人別では、保護者において 1 項目（「会話の機会を増やす」）のみで有意差が認められた。虐待歴の有無別では、保護者には有意差の認められる項目はなかったが、少年では 4 項目（「会話の機会を増やす」、「頑張りを認める」、「家庭の問題を解決する」、「再非行を防止する」）で有意差が認められ、被虐待歴のある少年は、その他の少年と比べて、少年院出院後に保護者が更生支援的行動をとってくれたと認識している割合は低かった。

（２）少年とその保護者（親子間）の認識のずれ

3-4-5 図は、出院後の保護者の更生支援的行動について、出院時に満足している（十分している）ので変わる必要はないと回答した以外の者を対象に、少年、保護者のそれぞれの回答について、第 1 回調査では、「とても期待している（とても思う）」と「やや期待している（やや思う）」とを合わせたものを「該当」に、「あまり期待してない（あまり思わない）」と「まったく期待していない（まったく思わない）」とを合わせたものを「非該当」に、第 2 回調査では、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」とを合わせたものを「該当」に、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」とを合わせたものを「非該当」にそれぞれまとめて表記して、親子間の認識のずれを見たものである。「再非行を防止する」で認識のずれが最も小さく、「家庭の問題を解決する」で認識のずれが最も大きく、33.8 %の親子に認識のずれがあった。特に「欠点を改める」では、親子間で、保護者は欠点を改めたと認識しているものの、少年は改めてもらえなかったと認識しているものの割合は 23.4%と最も高かった。

3-4-5図 更生支援的行動についての認識（親子間の認識のずれ）



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。
 4 親子間の認識が一致している比率の高い順に、項目を並べ替えている。

3 保護者の更生支援的行動が少年に与える影響

ここでは、保護者の更生支援的行動が少年に与える影響について検討する。6か月後の保護者による更生支援的行動（第2回保護者 Q4）の各項目につき、「まったくあてはまらない」に1点、「あまりそう思わない」に2点、「ややそう思う」に3点、「とてもそう思う」に4点を付け、合計したものを「更生支援的行動得点」とした（ただし、「再非行をしないよう注意や指導をした」については、平均値+1標準偏差の値が最大値（4）を上回ったため、天井効果があるものとみなして除外した。）。

「更生支援的行動得点」の平均値（ $M=21.48$ 点）を基準に、21 点以下を「更生支援的行動得点低群」、22 点以上を「更生支援的行動得点高群」と定義し、この2群と「出院6か月後の生活

状況」(第2回少年調査F2),「出院6か月後の観察官問題評価得点」,「出院6か月後の自己評価」との関係を経統計的に検討した(2群分けの結果,「更生支援的行動得点低群」(以下,「低群」という)=238名,「更生支援的行動得点高群」(以下,「高群」という)=226名となった。なお,各質問項目ごとに調査・回答上の欠損値があるため,以下の分析ごとに検定に用いられた人数は異なる)。

3-4-6 表は,高群・低群と生活の順調さについて,独立性の検定を行なった結果である($\chi^2(3)=7.742^{***}$)。高群は生活の順調な者が有意に多く,逆に低群には生活が順調ではない者が有意に多かった。このことから,保護者からの更生支援的行動が多く行なわれていることが,少年の少年院出院後の生活の順調さに影響していることが示唆される。

3-4-6 表 保護者の更生支援的行動と出院後6か月の少年の生活状況

区 分	総数	考えていたより ずっと順調に 進んでいる	だいたい考えていた とおりに進んでいる	考えていたほど 順調には 進んでいない	考えていたとおりには 全く進んでいない
更生支援的行動 得点低群	234 (100.0)	25 (10.7) - [3.0]	104 (44.4) - [0.5]	82 (35.0) [2.2]	23 (9.8) [1.3]
更生支援的行動 得点高群	128 (100.0)	46 (21.1) [3.0]	102 (46.8) [0.5]	56 (25.7) - [2.2]	14 (6.4) - [1.3]

注 1 法務総合研究所の調査による。
2 () 内は構成比である。
3 [] 内は調整済み残差である。

3-4-7 表①~④は,更生支援的行動と観察官問題評価得点について,独立性の検定を行なった結果である(交友関係: $\chi^2(3)=6.682^{\dagger}$,就労就学関係: $\chi^2(3)=16.770^{**}$,家族関係: $\chi^2(3)=14.793^{**}$,保護観察官・保護司との接触状況: $\chi^2(3)=12.826^{**}$)。

交友関係のみ有意傾向であったが,いずれの領域においても高群は,低群に比べて「まったく問題ない」の割合が高い。また,就労・就学関係において,低群が,高群に比べ「多少問題がある」の割合が高かった。これらのことから,少年院出院後6か月間という短い期間でも,保護者の更生支援的な関わりが生活の様々な領域の問題を低減させる可能性が示され,逆に更生支援的な関わりが乏しいことは,特に就労・就学面で悪影響を及ぼすことが示唆された。

3-4-7表 更生支援的行動と出院6か月後の少年の観察官問題評価得点

① 交友関係

	総数	まったく 問題ない	あまり 問題ない	多少 問題がある	かなり 問題がある
更生支援的 行動得点 低群	230 (100.0)	34 (14.8) - [1.98]	112 (48.7) - [0.47]	64 (27.8) [1.54]	20 (8.7) [1.31]
更生支援的 行動得点 高群	218 (100.0)	48 (22.0) [1.98]	111 (50.9) [0.47]	47 (21.6) - [1.54]	12 (5.5) - [1.31]

② 就労・就学関係

	総数	まったく 問題ない	あまり 問題ない	多少 問題がある	かなり 問題がある
更生支援的 行動得点 低群	230 (100.0)	50 (21.7) - [3.88]	96 (41.7) [1.90]	71 (30.9) [2.24]	13 (5.7) - [0.54]
更生支援的 行動得点 高群	218 (100.0)	84 (38.5) [3.88]	72 (33.0) - [1.90]	47 (21.6) - [2.24]	15 (6.9) [0.54]

③ 家族関係

	総数	まったく 問題ない	あまり 問題ない	多少 問題がある	かなり 問題がある
更生支援的 行動得点 低群	230 (100.0)	33 (14.3) - [3.33]	105 (45.7) - [0.05]	64 (27.8) [1.89]	28 (12.2) [1.90]
更生支援的 行動得点 高群	218 (100.0)	59 (27.1) [3.33]	100 (45.9) [0.05]	44 (20.2) - [1.89]	15 (6.9) - [1.90]

④ 保護観察官（保護司）との接触状況

	総数	まったく 問題ない	あまり 問題ない	多少 問題がある	かなり 問題がある
更生支援的 行動得点 低群	229 (100.0)	92 (40.2) - [3.24]	108 (47.2) [2.84]	23 (10.0) [1.39]	6 (2.6) - [0.89]
更生支援的 行動得点 高群	218 (100.0)	121 (55.5) [3.24]	74 (33.9) - [2.84]	14 (6.4) - [1.39]	9 (4.1) [0.89]

- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 () 内は構成比である。
 3 [] 内は調整済み残差である。

第5節 心のブレーキ

本節では、以下に示した質問項目に対する回答に基づき、非行を抑止する要因について見る。

第1回少年調査 Q8 , 第2回少年調査 Q8

もし、あなたが法律で禁じられているような「悪い」ことをしようと思ったとき、あなたを思いとどまらせる心のブレーキになるものはありますか。

(上の質問であると答えた人だけ答えてください。)

次の事柄のうち、あなたの心のブレーキになると思うものを3つまで選んでください。

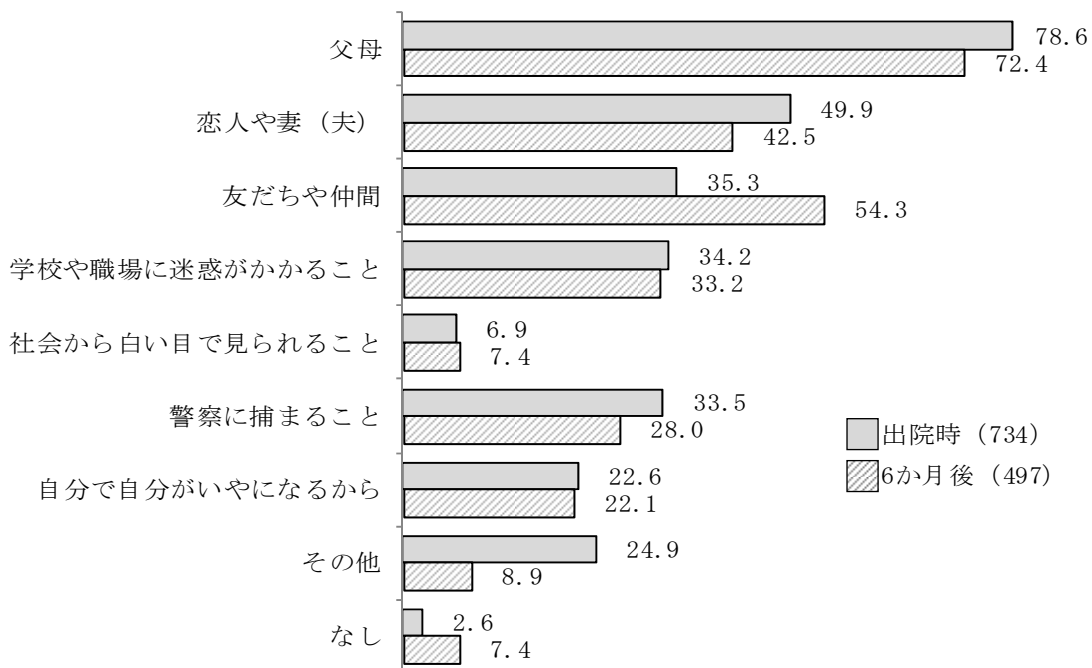
- 1 父母
- 2 恋人や妻（夫）
- 3 友だちや仲間
- 4 学校や職場に迷惑がかかること
- 5 社会から白い目で見られること
- 6 警察に捕まること
- 7 自分で自分がいやになるから
- 8 その他

3-5-1 図は、「もし、あなたが法律で禁じられているような『悪い』ことをしようと思ったとき、あなたを思いとどまらせる心のブレーキになるものはありますか。」という質問に対して、出院時及び出院6か月後の時点の少年の認識を見たものである。

出院時、6か月後共に、「父母」が最も高い割合で挙げられているが、6か月後には「友だちや仲間」を挙げる少年の割合が、出院時に比べて19.0pt上昇している。

「その他」に挙げられた主なものは、出院時は、「自分の将来や夢」(43人)、「その他の家族」(40人)、「少年院の生活や先生」(36人)、「被害者」(12人)、6か月後は、「その他の家族」(12人)、「少年院の生活や先生」(9人)、「自分の将来や夢」(7人)などとなっている。

3-5-1 図 心のブレーキ（出院時・6か月後別）



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 無回答の者を除く。
 3 () 内は、回答者数である。